

## 2025 年度国内研修 研修成果報告書

研修員所属・職名・氏名 文学部日本文学科 准教授 井原あや

研修課題 近現代における女性を取り巻く文学・文化とジェンダー

研修期間 2025 年 4 月 1 日～2026 年 3 月 31 日

研修機関 慶應義塾大学文学部 慶應義塾大学大学院 文学研究科

指導教授氏名 小平麻衣子教授

### 研修成果

以下、一年間の研修について、研修目的と研修成果、研修成果の概要、総括および謝辞の順にまとめた。

#### 1、研修目的

研修員はこれまで、近現代文学と女性作家の関わりや、メディアのなかで女性作家がどのような位置にあるのか、テキスト分析を行うとともにその表象についても検討を行い、研究を進めてきた。また、文芸雑誌や女性雑誌の読者投稿欄を通して、文学に親しみ消費する立場であった読者が、投稿者となり、文学／文壇への足掛かりを築いていく過程を調査するとともに、その過程で生じるジェンダーの力学などを検討した。

たとえば近年では、文壇デビュー時の瀬戸内晴美がどのような言説とともに語られたのか、いったんは文壇から排除され、再び自らの〈ことば〉を勝ち得ていく様を検討した。具体的には、当時の評者たちが瀬戸内本人を、そして小説を論じる際に用いたことばに注目し、〈文壇〉と呼ばれる場が女性作家に何を求めたのか、ジェンダー秩序や規範、欲望が作り出す不均衡な構造に目を向けた（「消費されることと捉え返すこと——瀬戸内晴美はどう語られたか」『ユリイカ』2022 年 3 月）。また、林芙美子についても、芙美子の死後にその作家像（作家イメージ）がどのように語られたのか、文学テキストに限らず、当時の女性雑誌のほか、多くの視聴者から好評を得たドラマ等を踏まえて検討し、穏健な女性（作家）像が生み出される背後にあるジェンダー規範を論じた（「〈林芙美子〉を語る——一九六〇年代、田中澄江『うず潮』とメディアのなかの〈林芙美子〉」『大妻女子大学紀要——文系』2023 年 3 月）。

さらに、雑誌や映画等のメディアに対してジェンダーの視点で研究を行うことの意義もまとめ（「メディア論 雑誌とアダプテーションからみえるもの」飯田祐子・小平麻衣子編『ジェンダー×小説 ガイドブック 日本近現代文学の読み方』2023 年 5 月、ひつじ書房）、その実践として多くの女性読者が参加した雑誌『詩とメルヘン』を調査し、本誌に向けられた評価に関する言説分析や投稿欄の検討を行った（小平麻衣子・井原あや・尾崎名津子・徳永夏子編『サンリオ出版大全——教養・メルヘン・SF 文庫』2024 年 2 月、慶應義塾大学出版会）。

こうしたこれまでの研究を踏まえつつ、本研修においては「近現代における女性を取り巻

く文学・文化とジェンダー」を研修課題とし、①これまでよりさらに広範な女性雑誌と文学の関係を検討すること、②2024年度より研修員が研究代表者をつとめる「1950年前後の女性雑誌を中心とした〈女子大生〉と〈BG〉表象をめぐる総合的研究」（科学研究補助金基盤研究(C)、研究課題番号 24K03632)に取り組むこと、③小平麻衣子教授を研究代表者とする「近代日本文学をめぐる〈批評〉概念の再審と女性批評史の構築」（科学研究補助金基盤研究(C)、研究課題番号 24K03665)に研究分担者として取り組むことを目指す。

そして、これらの課題を通して、女性表象、女性と教育、文学、批評等について研究を深化させていくことも本研修の目的である。この研修期間を、これまでの研究成果を総括することと、新たな研究対象、研究の視座を獲得する時間としたい。

さらに研修終了後は、本研修を教育の場にも生かしたい。本学においても、ジェンダーやフェミニズムに関心のある学生は多い。研修終了後は、ゼミをはじめとする授業においてもこうした視点を取り入れ、いずれ社会へ出て行く学生たちに、過去を振り返りつつ、今なお社会に根強く残る規範や秩序に向き合い、問い直していく力を身につけることができるようにしたい。

## **2、研修成果**

本研修期間中の成果は、以下の通りである。

論文4点、書評1点、事典の項目執筆1点を発表し、研究会で口頭発表を1回行った。

### **論文4点**

(1)「三島由紀夫「肉体の学校」——雑誌『マドモアゼル』と浅野妙子の表象をめぐる——」（『三島由紀夫研究』2025年5月、70-80頁）

(2)「女性雑誌と都市 「新東京」の〈BG〉たち」（伊豆原潤星・山口直孝・松本健太郎編『都市とポスト文学の詩学 浸食するフィクション／拡張するリアル』2025年5月、ナカニシヤ出版、91-100頁）

(3)「芝木好子の一九五〇年代と「ある女子大学生の死」小考」（『大妻国文』2026年3月、199-216頁）

(4)「一九五〇年代、〈女子大学生〉をめぐる言説——広津和郎「誘蛾燈」を視座として」（『大妻女子大学紀要—文系—』2026年3月、51-61頁）

### **書評1点**

「書評 齋藤樹里著『見立てと女語りの日本近代文学——斎藤緑雨と太宰治を読む——』（『昭和文学研究』2026年3月、206-208頁）

### **事典の項目執筆1点**

「新藤涼子」（『日本近代文学大事典』増補改訂デジタル版 2026年2月、「ジャパンナレッジ」収録のため頁記載なし）

## 口頭発表1回

「瀬戸内寂聴が描いた評伝」(第6回「女性と批評研究会」2025年9月14日、於・慶應義塾大学三田キャンパス)

## 3、研修成果の概要

研修期間中は、自身の研究に関連する研究会や読書会に出席したほか、国会図書館や日本近代文学館、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館等で研究課題に関連する資料の閲覧や調査を行い、先述した成果を発表した。これらのうち、論文と口頭発表について、各々の内容をもとに以下に概要をまとめた。

### 【論文】

(1)「三島由紀夫「肉体の学校」——雑誌『マドモアゼル』と浅野妙子の表象をめぐって」(『三島由紀夫研究』2025年5月、70-80頁)

(1)は、2024年12月8日に開催された「国文学言語と文芸の会 2024年度大会」(於・明治大学)における口頭発表「三島由紀夫「肉体の学校」と雑誌『マドモアゼル』」をもとに、加筆修正を行い『三島由紀夫研究』に寄稿したものである。本稿では、「肉体の学校」が連載された『マドモアゼル』の誌面構成を精緻に分析し、「肉体の学校」の主人公・浅野妙子が掲載誌『マドモアゼル』の誌面と共鳴するかのよう造形されている一方で、誌面との共鳴や重なり収まらない浅野妙子の批評性や力強さを指摘した。

「肉体の学校」は、小学館より刊行されていた女性雑誌『マドモアゼル』に1963年1月から12月まで連載された小説で、旧華族出身で敗戦後に夫である男爵と離婚し、その後高級洋裁店を営んでいる主人公・浅野妙子が、美しく傲慢で、上流階級の若者にはない野性味を持ち合わせた佐藤千吉と出会い、惹かれ合うものの、千吉に裏切られたことが判明し別れを告げるという物語である。本作は連載後、1964年に集英社より単行本化され、さらにその翌年(1965年)には同題で映画化もされている<sup>1)</sup>。

戦後、様々な雑誌が復刊・創刊し雑誌文化を形成したが、それは女性雑誌においても同様である。たとえば、1946年には『婦人公論』が復刊したほか、『婦人朝日』や『婦人生活』などの女性雑誌が復刊・創刊した。こうした戦後の女性雑誌には、様々な作家が小説やエッセイを発表していたが、三島由紀夫もその一人で、『婦人画報』(1947年3月)に「恋と別離と」を発表し、その後も1950年には「純白の夜」を『婦人公論』に連載している。同様に1960年代も三島は女性雑誌に小説を発表しており、「肉体の学校」もそうした女性雑誌の一つである『マドモアゼル』に一年間連載された。

『マドモアゼル』は1960年1月の創刊号から、多くの作家が小説のみならず特集記事等にも文章を寄せている。たとえば三宅艶子や遠藤周作、原田康子、有吉佐和子らが特集「女性幸福論 あなたは恋愛候補生」に寄稿しているほか、源氏鶏太、曾野綾子、新田次郎らが小説を掲載し、前年に直木賞を受賞した平岩弓枝も「男性No.1 拝見 永六輔」という記事を書いているが、三島もまた、創刊号の記事「ハート・ブレイク・病院——トラブル一分間治療室」において「院長」として登場しており、その後の読者と編集者の対談記事を見ても、

読者から定評のある比較的身近な作家の一人であったことがうかがえる。<sup>2</sup>

三島は1948年頃から「〈貴族階級を描く作家〉として認識されていた」<sup>3</sup>という。「肉体の学校」の主人公である浅野妙子も、旧華族出身で男爵と結婚していた過去を持つ人物で、こうした妙子の出自は「肉体の学校」の連載が開始された1963年1月の記事「美貌のひとつとき」で紹介された旧華族の「名流令嬢・若奥様」たちにも重なり合うものであった。このような誌面と主人公・浅野妙子の重なりは他にも見られる。小説の中で浅野妙子は装うことに情熱を持つ人物として描かれ、その装いは実際のブランド名を用いながら詳細に描かれている。こうした妙子の装いは高級洋裁店を営んでいることを示す一方で、『マドモアゼル』が写真入りで紹介するパリを中心としたモードとも共鳴していたことが明らかになった。一方で妙子はそうしたモードが「大嘘」(447頁)<sup>4</sup>であることも自覚していて、〈装うこと〉が自分自身を語る術であると同時に消費社会と分かちがたく結びついていることをよく理解しており、誌面と共鳴するモードを纏う「名流」として描かれているようであり、批評性も含み持つ存在であったことがわかる。

読者の反響についても調べたところ、1964年に『マドモアゼル』は創刊以来初となる「マドモアゼル読者賞」を創設していた。この読者賞は1963年に誌面に掲載された作品の中から読者投票によって読者賞が決定するのだが、「肉体の学校」はその「第一部門」(小説や手記等の一般教養記事から選出される)5作品のうちの1つに挙げられていた。最終的に読者賞は有吉佐和子の「連舞」に決定したが、「肉体の学校」が5作品の中の1つに挙げられていたことを考えると、読者から支持された小説であるとわかるが、読者は浅野妙子の何に惹かれたのだろうか。誌面には、「名流」と紹介された女性たちのほかに、当時「BG」と呼ばれた企業の事務職の女性たちが月給をやりくりして生活する様子も掲載されている。こうした読者のありようを踏まえ、旧華族であることよりも自分で道を切り開くことを選び、努力するその力強さに読者は心を寄せたのであると結論づけた。

(2)「女性雑誌と都市 「新東京」の〈BG〉たち」(伊豆原潤星・山口直孝・松本健太郎編『都市とポスト文学の詩学 浸食するフィクション／拡張するリアル』2025年5月31日、ナカニシヤ出版、91-100頁)

(2)は文学研究や社会学など、分野を超えて都市や社会、観光について考える書籍の中で、女性雑誌と都市について考察した論である。本稿では、震災や戦災によって変容した都市・東京で働く〈BG〉(「ビジネスガール」の略。企業で働く事務職の女性に対して用いられた呼称)を社会はどのように評したのか、そして〈BG〉はどのような〈声〉を挙げたのかを検討した。

なお、本書刊行後、2025年9月28日に『都市とポスト文学の詩学 浸食するフィクション／拡張するリアル』の公開読書会が二松学舎大学で開催され、研修員も出席した。読書会では、編者である伊豆原潤星講師、山口直孝教授、松本健太郎教授、そして本書の執筆者の方々によって専門領域を越えて横断的にフィクションと都市についての討議が行われ、文学研究のみならず社会学を専門とする研究者の方々のお話をうかがい、学際的な広がり

が生まれる貴重な機会となった。

本稿では、まずは関東大震災後、1920年代後半に都市景観を変貌させていく東京と、そこで働く「ビジネスガール」たちが社会からいかに評されていたのか、その評価の有様に注目した。さらに、戦後、東京が復興していく様を確認し、その都市に集う〈BG〉がどのように表象されたのかを検討した。

1923年の関東大震災によって大きな被害を受けた東京は、震災後、新たな都市景観を作り上げ、たとえば震災後の丸の内では、会社や事務所が三倍ほど増加し、「近代日本の社会を象徴する場所」<sup>5</sup>となった。こうした当時の東京には事務員として働く女性も増加し、1927年7月には『JOURNAL OF BUSINESS GIRLS』<sup>6</sup>（1927年9月より誌名が『婦人とビジネス JOURNAL OF BUSINESS GIRLS』に変更するので、本稿では『婦人とビジネス』と呼ぶ）が刊行された。奥付によると1927年7月の創刊号は会員に向けた非売品で、27年8月から会員には「無代頒布」とあるが定価も記載されているので市販もされたようで、誌名の通り「ビジネスガール」を読者対象としている。

当時、働く女性は「職業婦人」と呼ばれることが多く、『婦人とビジネス』においても同様に呼ばれる場合もあるが、「ビジネスガールの向上に役立つ事こそ私に与へられたる貴き使命」（商用英語研究社主 山本保信「創刊の辞」1927年7月、3頁）というように、「ビジネスガール」という呼称も用いられていた。誌面を確認してみると、「東洋タイプライターについて」（本社調査部、1927年9月、19-21頁）のように、タイピングや速記に関する情報や知識など実務的な記事を中心に構成されている。一方、誌面には丸の内働く会員／読者の文章も寄せられており、そこには彼女たちが主体的に働くことを目指そうとするものの、「私等の立場」<sup>7</sup>に理解のない周囲や社会の評価によってもどかしい思いも示されていた。このように『婦人とビジネス』には、1920年代に「ビジネスガール」と呼ばれた女性たちが、自分たちに向けられた評を変えていきたいと願う切実な思いが記されていた。

同様に、戦後の東京にも「ビジネスガール」は登場する。1950年代になると、雑誌や書籍には、「新東京」あるいは「新東京名所案内」のように東京に新たな価値や意味を見出そうとする言葉が出現するようになる。たとえば、『自由国民・バイブル版第7集 今日の新東京なんでもわかるバイブル』（自由国民社、1953年1月）には、「二十四時間で見る新東京のすべて」（岡田喜秋、49-67頁）と題した案内記が掲載されており、数々の名所をバスで巡りながら戦災によって荒廃した東京が再生していく様を見せている。こうした「新東京」の有様は、女性雑誌においても伝えられており、『婦人生活』には丸の内を「ニューヨーク」にたとえながらバスで「新東京」を巡る様子が記されていた<sup>8</sup>。このように、荒廃から復興する都市の象徴として「新東京」という言説が用いられていたことがわかる。

同時期には女性が「新東京」に代表されるような戦災から復興した都市で働き始めた。そのため、この時期の女性雑誌の中には、働く女性に光を当てたものが目立つ。たとえばモデルが「通勤服」（『婦女界』1952年9月、ページ記載なし）を身に纏ってポーズをとった姿を提示するページなど装うことと働くことを交差させた写真は、都市部の女性たちの〈憧れ〉を反映したものと見える。誌面を通じて、こうした都市で働く女性のイメージを流通させることで、読者に〈憧れ〉を抱かせ消費に結びつけていったのである。

このほか、職場と女性をつなぐ役割も果たした。『婦人生活』では、「初めて職場について若い女性のための親切手帖」(1952年5月、229-257頁)という特集が組まれたほか、『主婦と生活』においても「特集 世に出る若い女性のために」(1952年3月、229-260頁)という特集が組まれていた。これらの特集では、働きはじめる若い女性に向けて職場の心得を提示する一方で、明るく清々しい態度や清楚さが評価される〈お手本〉として示されており、女性ジェンダーに求められた他者への配慮や気遣いにも結びついている。このように、新しい都市に生きる女性としての都会的で洗練された装いと、旧来的な評価の枠組みである役割や規範が入り混じった〈BG〉の姿が提示されていたのである。こうした点からは、1920年代後半に『婦人とビジネス』で読者が綴った働くことに対する周囲の評価が改善されにくい様子が見えた。

### (3) 「芝木好子の一九五〇年代と「ある女子大学生の死」小考」(『大妻国文』2026年3月、199-216頁)

(3) は、芥川賞受賞作家である芝木好子<sup>9</sup>の1950年代の創作と評価に注目し、「ある女子大学生の死」(『群像』1955年10月)について検討した論である。芝木については、河崎美緒が「女性」を主題とした作品を中心に旺盛な執筆活動を続けてきた」にもかかわらず「現在まで研究の対象とされること」<sup>10</sup>は少ないと指摘するように、近年少しずつ研究成果が積み重ねられるようになったものの、芝木の小説が論じられる機会は限られている。また、芝木の場合は作品集や名作選等は刊行されているものの、個人全集が刊行されていない。

そこで、まずは国会図書館等で芥川賞受賞以降の芝木好子の創作活動について調査した上で1950年代に至るまでどのように評価されたのかを分析し、その後、「ある女子大学生の死」を検討して、この小説が当時の社会においていかなる意味を持つのか考察した。

先述の通り、芝木好子は個人全集が刊行されていないので、創作を網羅的に追うことは難しいが、芝木自身がまとめた「芝木好子 年譜」(『昭和文学全集』第19巻、小学館、1987年12月)に記載されていない小説として、様々な葛藤を抱えながらも絵を描くことを諦めない画家・英子を描く「支柱」(『文藝首都』1944年1月)や29歳の栄子の縁談を描く「無駄な日」(『新創作』1942年12月)、また、児童向け読み物として、出産を控えた姉に会うために母と満州に行く光子を描いた「初旅」(『少国民の友』1943年12月)等が確認できたが、戦時下で雑誌が統廃合されるなか、新進作家である芝木にとっては限られた場での発表であった。戦後、芝木は戦後早々に復刊した『文藝首都』(1945年12月、復刊第2号)の巻頭に「秋箋」を発表し、文学講習生から出発して作家として生きることを目指す主人公美樹子の戦時中を含む10年間を描いた。ほかにも、経済的に困窮しながらも戦地から戻らない夫を待つ妻の葛藤を描いた「待つ日」(『光』1946年7月)や、婚約者が戦地で生死不明となったため別の男性と結婚した園子と、復員した婚約者に恋心を抱く園子の妹・初枝を描いた「はたち」(『ソレイユ』1946年12月。『ソレイユ』の表記は奥付に拠る)など精力的に小説を発表している。

それゆえ現在こそ取り上げられる機会が少ないが、当時はかなり注目されており、文芸評

論家の板垣直子が、芝木について、同じく『文藝首都』の同人であった大原富枝とともに評価していることが判明した<sup>11</sup>。

一方、1950年代初頭から50年代半場頃まで、一般的に芝木は「停滞期」<sup>12</sup>と見做されることが多く、「洲崎パラダイス」(『中央公論』1954年10月)や「洲崎界限」(『別冊文藝春秋』1955年4月)など洲崎と女性を描いた一連の小説以外触れられることは少ない。そのせいか50年代に入ると辛辣な評も見られ、たとえば十返肇は「彼女の小説は苦勞のない女が無理に女の苦勞を書いたツクリモノらしさが目立つ」<sup>13</sup>と評しているが、芝木がどのように時代と向き合いながら創作活動を続けたのかは、精緻に読み解く必要があるだろう。

1949年に新制大学が設立され、僅かではあるが大学に進学する女性たちが誕生した頃、作家のなかには女子大学生を登場させた小説を書くものがあつた。芝木もまた、「異郷」(『小説新潮』1952年2月)では、若い頃に駆け落ちし満州を放浪した過去を持つ主人公三千子の姪で、大学進学が決定している快活で行動的な洋子を登場させたほか、戦時中の空襲で夫を亡くした後、女子大学に入学した奥野紀久子が農業研究所の入所試験を受ける場面から始まる「女心哀歎」(『婦人倶楽部』臨時増刊、1953年10月)、大学教授の重光が自分の教え子であった女子大学生を回想する「ある女子大学生の死」(『群像』1955年10月)、大学生の千津子が恋人と大学講師の間で揺れるものの、自己を見詰め直すために高校の教員になる決意を固める「三人」(『それいゆ』1959年6月)などを発表している。

「ある女子大学生の死」は、重光の勤める大学に通う貝島瑛子が結核と思われる病で死去するまでを描いたもので、周囲に馴染まず距離を置く瑛子の過去(1945年8月以降、満州で瑛子に起きたこと——父母と妹弟をなくし、自身も「大勢の軍人」〔44頁〕<sup>14</sup>に凌辱される)が次第に明らかになる小説である。先述の通り、戦後、芝木は様々なかたちで〈戦争〉を描いており、この「ある女子大学生の死」もそうした小説の一つといえる。また、先の「芝木好子 年譜」には1943年に「大東亜省の委嘱で川上喜久子氏ら三名と満州開拓地を一カ月見学」<sup>15</sup>したとあり、芝木たちは義勇隊訓練所を訪問している<sup>16</sup>、開拓地の風景や訓練所の記憶と、敗戦前後の満州で起きた戦時性暴力がこの小説のモチーフになったと思われる。本作に対する同時代の評価は総じて高くなく、なかには貝島瑛子と恋人が肉体関係におよんでいたことを取り上げて「戦後の若い男女の生態」<sup>17</sup>に注目するものもあつたが、小説には、過去を問われた瑛子が「きつと唇を噛み、みるみる眉間を険しくして、過去の記憶に痛められた暗い眼」(33頁)になる様子が描かれており、瑛子が過去を語ることを拒否する、あるいは語ろうとしても語ることの出来ない様子が示されている。こうした点からは、この小説が「男女の生態」に力点が置かれていたわけではないことがうかがえるだろう。

本作が掲載された『群像』(1955年10月)の「編集後記」に「戦後十年、創刊の記念号である十月号」と記され、「目次こそ、つまり内容こそ編集方針であり、編集者の意志である」<sup>18</sup>とあるように、この〈時〉は「戦後十年」経った1955年である。「ある女子大学生の死」は、この「編集後記」と響き合い、戦後復興の影で次第に忘却されようとする〈戦争〉を、瑛子を通して読者に繋ぎとめていく点に意味がある。この時期の芝木は、女性や女子大学生をモチーフに様々なかたちで〈戦争〉を描くことを試みており、本作もその一つといえる。当時の社会においては、〈女子大学生〉は新たな存在として捉えられ、女性が大学に行

くことに対して疑念を抱く評も出始めるようになっていた<sup>19</sup>。そうした中で、「ある女子大学生の死」は、戦後の新たな存在としてイメージされる〈女子大学生〉ではなく、苦しみを負った戦争経験者として描き出した点に特徴があると結論づけた。

(4)「一九五〇年代、〈女子大学生〉をめぐる言説—広津和郎「誘蛾燈」を視座として」(『大妻女子大学紀要-文系-』2026年3月、51-61頁)

(4)は、新制大学設立後の1950年代において〈女子大学生〉がどのように表象されたのか、広津和郎「誘蛾燈」(『婦人朝日』1952年6月～1954年7月)を視座に、小説、映画、単行本という三点から検討した。まずは小説「誘蛾燈」が描いた女子大学生たちの友情について検討した後、映画化された際のシナリオを検討し、小説「誘蛾燈」の女子大学生の姿が映画製作の場でどのように受け取られ、シナリオに体现されたのか考察を行った。そして、1955年に『誘蛾燈』(集英社、1955年5月)が単行本として刊行された後の評や関連する言説を分析し、当時の〈女子大学生〉表象を検討した。

女性の大学進学の本格的な始まりは、戦後、新制大学が設立された1948年から49年にかけてのことである。1945年10月、GHQが五大改革指令のなかで女性解放と教育の民主化を掲げたことによって政府は教育制度の見直しを行うことになり、翌46年には女性に対して旧制大学の一部や大学予科の門戸が開放された<sup>20</sup>。そして、1949年には新制大学(女子大学・共学ともに)が発足し<sup>21</sup>、この新学制のもとで学ぶ女性たち——女子大学生が誕生した。

こうして誕生した女子大学生は、文学作品にどのように描かれ、またメディアのなかでどのように見做され、表象されたのか。「誘蛾燈」は都内の大学に通う21歳の女子大学生3人を主人公とする小説で、朝日新聞社が刊行する女性月刊誌『婦人朝日』に二年間にわたって連載された。簡単に概要を示すと、小森田みち子、佐伯伊都子<sup>22</sup>、染井しげ子はH大学の同級生で、小さな家を借りて3人で暮らしている。経済的に苦しい三人はアルバイトをしながら大学に通い、時に焼酎を飲んで日々の憂さを晴らしていた。そうしたなか、みち子は画家の山形恒夫と出会い、ユーモラスな人柄に触れて交際するようになる。大学入学以前に勤めていた小学校での出来事をきっかけに男性に不信感と反抗心を抱く伊都子も山形には心を許し、彼の戦友で今は実業家の権藤と知り合う。一方、しげ子はアルバイト先の息子の清吉から言い寄られるうちに清吉の想いにこたえるようになるが、自分の後ろめたさをみち子と伊都子に話せないまま家を出て清吉と暮らし始めるものの、彼の行動に幻滅して別れ、バーで働くようになる。清吉の子どもを妊娠したことに気付いたしげ子は、家を出てから会うことのなかった伊都子に相談し中絶手術を行う。年が明け、3人の家に帰ってくるしげ子を伊都子とみち子が迎えに行く場面で物語は終わる。

この小説には、みち子と画家の山形の恋愛や、清吉に言い寄られ断れないまま同棲するしげ子、口数は少ないが常に公平な態度で接する権藤に淡い恋心を抱きはじめる伊都子など、3人を取り巻く恋愛要素が含まれているが、結果的にその恋愛が成立したのはみち子と山形のみであり、恋愛が彼女たちを大団円に導くわけではない。

それよりも注目したいのが、伊都子の過去の辛い経験を根底に置いて彼女たちが互いに思いやり支え合う、友情の有様である。伊都子は小説家を志しているが、みち子は伊都子の描く「或山間の小都会を舞台に、一人の小学校の女教師」(53頁)<sup>23</sup>の物語が、伊都子の過去を題材にしたものであることに気が付き、彼女の〈書く行為〉の背後にある、かつて心に負った深い傷に思いを寄せて伊都子を励まし続けるのである。こうしたみち子の温かな優しさは常に伊都子に向けられ、伊都子を一人にはしない。そして伊都子もまた、もう一人の友人、しげ子を献身的に支えていく。妊娠に気付いて憔悴するしげ子に対し、伊都子はしげ子が自分の身体と人生を自分で決めることが出来るよう励まし続け、しげ子を心配し中絶手術後の宿泊先も手配して寄り添う。その結果、しげ子は家出前から諦めていた大学にもう一度復帰する意思を伊都子に伝えるのである。

このように小説「誘蛾燈」からは、新制大学に通う3人の女性が大学という〈場〉で出会い、時に迷いながら親身に互いを支え合い、困難を乗り越えて一步を踏み出す主体的な姿が見て取れる。

一方、映画「誘蛾燈」(脚本：猪俣勝人・山本嘉次郎、監督・山本嘉次郎、1953年)では、小説とは異なる〈女子大学生〉の姿が描き出されており、映画の宣伝や紹介においても「恋愛と結婚の書ともいべき女性向きの作品」<sup>24</sup>とあるように、恋愛を描いた映画として捉えられていた。先述の通り、小説「誘蛾燈」で恋愛が成立するのはみち子と山形のみで、しげ子は清吉と別れて自らの意志で歩き出すことが示され、伊都子も権藤にほのかな恋心を抱くもその思いを伝える間もなく権藤は事業のため大阪に行き東京へは戻らない。しかし映画「誘蛾燈」は、みどり(小説版の「みち子」をさす)と山形、しげ子と清吉、美都子(小説版の「伊都子」をさす)と権藤という3組の恋愛を中心に描いているのである。こうした違いは、小説が連載されている段階で映画の製作・公開が行われ、結末が示されないために生じたようにも見えるが、広津による「あとがき」からは、また別の意味が含まれていたことがわかる。「誘蛾燈」は1955年に朝日新聞社から同題で単行本が刊行された後、1956年に角川小説新書からも刊行されているが、その「あとがき」で広津は映画化のいきさつについて、「目指してゐる結末は、作者の頭の中に既に出来上がつてゐたので、それを話したのであるが、今日の映画の道徳的約束では、男から逃げて人工早産をするといふ処が困るといふのである。それで映画は原作とは離れて映画の結末をつける事になつた」<sup>25</sup>と述べている。つまり広津による「あとがき」を読む限り、小説「誘蛾燈」の後半の山場であるしげ子の妊娠中絶は、映画においては「道徳的約束」から外れているために描けなかったということになる。確かにシナリオには、自らを「妻」と言い、清吉に「母親のようないとしさ」(「71 同〔「青葉荘」をさす——引用者注〕内部」)で接するしげ子の様子が描かれており、しげ子を連れ戻そうとした美都子は心を入れ替えて働く清吉を認め、家で待つみどりや山形、権藤にしげ子たちの生活を報告し、みどりと山形、しげ子と清吉の門出を祝う。そして権藤が美都子に結婚を申し込み、美都子が曖昧に返答をまぎらわせたところで物語は終わる。

このようにシナリオでは、しげ子が清吉を更生させる役割を担い、二人で再出発をはかる姿が描かれていた。映画では小説の伊都子が小学校の教員時代に受けた仕打ちが詳しく描かれないせいか、伊都子が自らの過去をしげ子に重ねながら献身的に寄り添い、しげ子が自

らの身体と生き方を決断していく姿はシナリオには描かれない。しげ子は、男性に対して寛容で忍耐強い妻という定型の通りに描かれ、小説とは異なる姿を見せるのである。小説「誘蛾燈」が迷いながらも支え合い困難を乗り越えた伊都子・みち子・しげ子の友情を描いたのに対し、映画「誘蛾燈」では規範の中におさまる「恋愛と結婚」<sup>26</sup>を描いた物語へと変容したのである。

小説「誘蛾燈」は、『婦人朝日』での連載終了後、1955年に朝日新聞社から単行本として刊行されたが、この刊行後、「誘蛾燈」は女子大学生に対する批評の場でも紹介されるようになる。その評のなかには、「誘蛾燈」の3人を例に女性の大学進学に対する疑念を示すものもあった<sup>27</sup>。「誘蛾燈」の主人公3人に対する辛辣な評と、その先にある女性が大学に進学することに対する批判的な視線の源泉は、新制大学が設立されてから数年を経て、少しずつ女子大学生の存在に注目が集まるなかでメディアを賑わせた「女子学生亡国論」等の〈女子大学生〉に向けられた批判と繋がるものである<sup>28</sup>。小説「誘蛾燈」と映画「誘蛾燈」の関係、そして単行本『誘蛾燈』刊行後の〈女子大学生〉言説からは、〈女子大学生〉という存在がいかにか時代のジェンダー規範と結びつきながら描かれ、評価されていたのか捉えることができた。

#### 【口頭発表】

「瀬戸内寂聴が描いた評伝」（第6回「女性と批評研究会」2025年9月14日、於・慶應義塾大学三田キャンパス）

「女性と批評研究会」は、小平麻衣子教授を研究代表者とする科研費研究課題「近代日本文学をめぐる〈批評〉概念の再審と女性批評史の構築」（科学研究補助金基盤研究(C)、研究課題番号24K03665）の研究会である。研修員は分担研究者としてこの科研費研究課題に取り組んでおり、研究会に毎回出席している。その第6回目に発表の機会を得て、作家・瀬戸内寂聴（瀬戸内晴美）が描いた評伝について発表した。

瀬戸内寂聴の小説には、近代の女性を描いた評伝がある。本発表では、当時の文壇と女性作家の関係や女性作家に向けられた評価や言説などを分析した上で、瀬戸内の描いた評伝の特徴と批評性について検討した。発表後の質疑応答では、参加者から質問や助言をいただき、大変有意義な時間となった。なお、本発表については、2026年度に論文化を目指している。

#### 4、総括および謝辞

ここまで報告した通り、本研修期間は、研修課題に向き合い、学び、その成果をまとめる貴重な時間となった。今後は、研修期間に得た知見をもとに研究を進めることを目指したい。

特に2026年度は、〈女性詩〉を特集とする昭和文学会春季大会（2026年6月13日、於・亜細亜大学）での基調報告や、先の「口頭発表」に挙げた瀬戸内晴美の評伝に関する論文化等も控えている。

さらに、研修期間中の成果や知見は、研究のみならず大学の授業にも取り入れ、学生たち

の学びを支えることができるよう努めたい。本報告書の「研修目的」に書いたように、本学においてもジェンダーやフェミニズムに関心のある学生は多い。小説や雑誌からは、対象とする出来事を社会がどのように語り、イメージしていたのかを検討することができる。小説や雑誌を通して今なお社会に根強く残るジェンダー規範や秩序に向き合い、問い直していく力を身につけることができるよう、研修期間に得た知見や成果を、授業を通して学生たちとともに学んでいきたい。

最後に、国内研修をお認め下さいました大妻女子大学の先生方、職員の皆様に心より御礼申し上げます。皆様のおかげで、一年間非常に有意義な時間を過ごすことが出来ました。

そして、研修先として受け入れをお認めいただき、ご指導いただきました慶應義塾大学小平麻衣子先生にも、心より御礼申し上げます。今後も一層研究や教育に励みたいと思います。貴重な機会を、本当にありがとうございました。

---

<sup>1</sup>監督・木下亮、出演・岸田今日子、山崎努、東宝映画。なお、「肉体の学校」は1998年にフランスにおいても『L'ECOLE DE LA CHAIR』というタイトルで映画化されている。

<sup>2</sup>「愛読者合評会」(『マドモアゼル』1960年5月、295頁)において、読者の一人が「到達の間では石原さん三島さん…平岩さんも人気があるわ」と意見を述べている。

<sup>3</sup>本橋龍晃「終戦後の女性誌と三島由紀夫の太宰言説——没落貴族表象を視座にして」(『Intelligence』2021年3月、90頁)

<sup>4</sup>三島由紀夫「肉体の学校」本文の引用は『決定版三島由紀夫全集』第9巻(新潮社、2001年8月)に拠り、カッコ内に頁数を示した。

<sup>5</sup>初田亨「第6章 サラリーマンの都市」『繁華街の近代——都市・東京の消費空間』東京大学出版会、2004年4月、200頁。

<sup>6</sup>発行所は、奥付によると創刊から1928年2月までが商用英語研究社で、1928年3月に婦人とビジネス社に変更している。

<sup>7</sup>千栄子「思ふがまゝに」『婦人とビジネス』1928年10月、29頁。

<sup>8</sup>無署名「新東京名所めぐり とんち教室お上りさんの巻」『婦人生活』1952年5月、206頁。

<sup>9</sup>芝木好子は「青果の市」(『文藝首都』1941年10月)によって1942年に芥川賞を受賞している。

<sup>10</sup>河崎美緒「選択する女たち——芝木好子と〈自伝的創作〉——」『近代文学 研究と資料』2008年3月、114・115頁。

<sup>11</sup>たとえば板垣直子は、芝木と大原を「新進の双璧」と捉え、「構成と達者な文章」を評価している(「女流文学総評」(板垣直子『婦人文庫』1946年10月、60・61頁)。また、「女流文藝界の動き」においても板垣は芝木と大原を「今日の新人を代表する見本のような位置」にあると述べている(板垣直子「女流文藝界の動き」『婦人年鑑(昭和二十三年)』日本婦人新聞社、1948年1月、255頁)。

<sup>12</sup>瀬沼茂樹「作家と作品 壺井栄 芝木好子」『日本文学全集』第76巻、1968年6月、430頁。

- 
- <sup>13</sup> 十返肇「〔女流作家うらおもて〕芝木好子」『現代文壇人群像』六月社、1956年6月、136・137頁。
- <sup>14</sup> 「ある女子大学生の死」本文の引用は初出に拠り、カッコ内に頁数を示した。
- <sup>15</sup> 芝木好子編「芝木好子 年譜」『昭和文学全集』第19巻、小学館、1987年12月、1016頁。
- <sup>16</sup> 無署名「はしがき」(『伸びゆく開拓地と女性』大東亜省満州事務局、1944年3月)参照。この「はしがき」によれば、川上喜久子、芝木好子、阿部静枝、杉谷壽賀の4名が「開拓地文化報導班」として派遣されている。なお、本書に収められた芝木の随筆「開拓地の女性」には、芝木たちが「勃利大訓練所」を訪問したことが記されている。
- <sup>17</sup> 奥野健男「〔文芸臨床例〕自我と作品の関連性」『日本文学の病状』五月書房、1959年1月、181頁。
- <sup>18</sup> (O)「編集後記」『群像』1955年10月、240頁。
- <sup>19</sup> たとえば「この人達は、学問をしてどうするつもりだらう」(福原麟太郎「女子学生」『群像』1952年5月、47頁)というように、女性が大学で学ぶことに対する疑念を述べた評が出現している。ほか、1950年代半ばから後半にかけて、雑誌の批評等を中心に、女性が大学に進学することに対する疑念や批判が示されるようになった。
- <sup>20</sup> 湯川次義『戦後教育改革と女性の大学教育の成立 共学・別学の並立と特性教育の行方』早稲田大学出版部、2022年3月参照。
- <sup>21</sup> この新制大学の発足に先立ち、前年の1948年には女子大学5校を含む12校の新制大学が発足している。(小山静子『戦後教育のジェンダー秩序』勁草書房、2009年5月参照)
- <sup>22</sup> 伊都子の名前は『婦人画報』連載時には「佐伯美都子」であったが、1955年に刊行された単行本では「佐伯伊都子」と記され、『広津和郎全集』第7巻(中央公論社、1988年12月普及版発行)収録の際も「佐伯伊都子」と記載されているため、本稿においても「佐伯伊都子」とした。ただし、『婦人朝日』連載中に公開された映画「誘蛾燈」では、伊都子の名前は連載時に用いられていた「美都子」であるので、本稿では小説「誘蛾燈」の場合は「伊都子」を、映画「誘蛾燈」の場合は「美都子」を用いた。また、「小森田みち子」も映画では「小森田みどり」に変更しているので、映画の場合は「みどり」を用いることとする。
- <sup>23</sup> 小説「誘蛾燈」本文の引用は『広津和郎全集』第7巻(中央公論社、1988年12月普及版発行)に拠り、カッコ内に頁数を示した。また、映画「誘蛾燈」のシナリオの引用は「誘蛾燈」(広津和郎原作、猪俣勝人・山本嘉次郎脚本、山本嘉次郎監督、東宝配給、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館所蔵、請求記号ヨ05 9961)に拠り、カッコ内にシーンナンバーを示した。
- <sup>24</sup> 無署名「今週の映画 誘蛾燈」『週刊サンケイ』1953年10月18日、42頁。
- <sup>25</sup> 広津和郎「あとがき」『誘蛾燈』角川書店(角川小説新書)、1956年2月、221頁。
- <sup>26</sup> 注24に同じ。
- <sup>27</sup> 堀秀彦「なんのための学問か 広津和郎『誘蛾燈』のなかの女子大生たち」『本の中に生きる女たち』春陽堂書店、1958年3月。

---

<sup>28</sup> 新制大学設立後、1950年代後半頃になると、様々な雑誌で女子大学生に対する批判や疑念を示す記事が掲載されるようになった。これらの批判は、小山静子が「この議論は、だからこそ、男性と同じように大学教育を受ける女性という存在を社会がどのようにとらえていたのか、ストレートに示していると思う」といい、「大学教育を享受するのは男性であるという意識がなくなったというわけではなかった」（小山静子「第四章 女子学生批判が意味したもの」『戦後教育のジェンダー秩序』勁草書房、2009年5月、151・186頁）と指摘する通り、開かれたはずの大学が実は閉鎖的な意味合いを強く含み持っていたことを意味する。